

寫眞週報

情報局
一月六日 第二五三號



新年號



情 報 局 編 輯

一 月 六 日 第 二 百 五 十 三 號

寫 眞 週 報



敵アメリカ力の戦意と戦力は頂上に達してきたぞ
我々はどうか

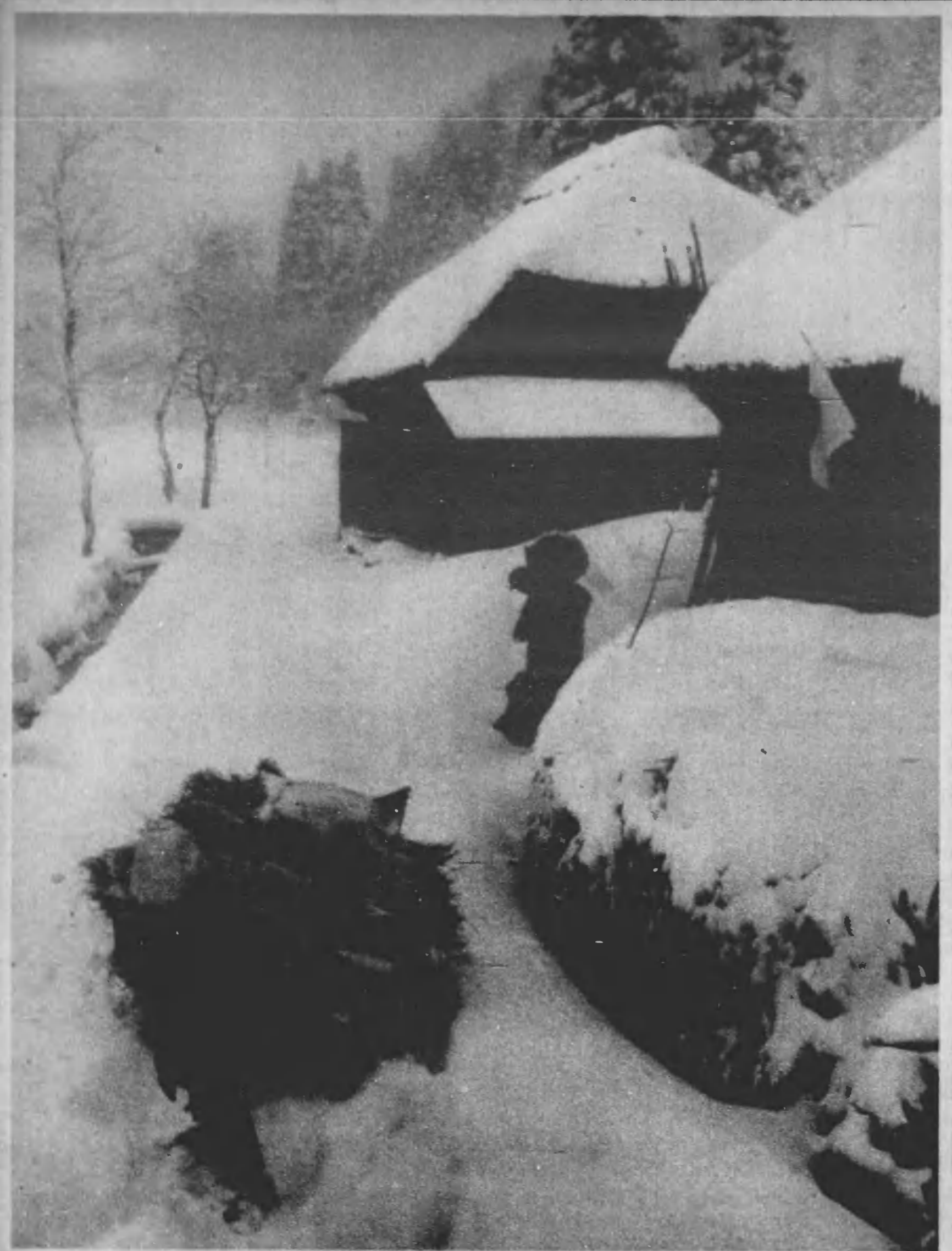
今年こそは生やさしい年ではない

坐して戦ひに勝てようか

心も物もなほ一層締めてかゝるのだ 誰が

それは僕なのだ、君なのだ、あなたなのだ

「我々の心」は深く、戦意も高く、戦力も頂上に達したぞ



勅 題
農 村 新 年

豊年の光も芽出
たく白雪におぼは
れた村々、大戦第
二年目の新年を迎
へて、この年もい
よいよ豊かな稼り
を得ようと、農士
らはいま、祈りに
も似た一すぢの心
に黙々と多忙な冬
の営みにうち過し
てゐるのだ

妙高山麓にて
撮影 渡邊義雄



はくも凍て 北邊至嚴の護り

影 東軍報道部

吹まくる朔風、肌をさす寒氣も物かは、雪原の彼方、陣地を配んで最前線の監視哨に立つ少哨の眼は微動たもしない。

寒もやむぬ最前線の監視哨に立つ少哨の眼は微動たもしない。

凍る戦車の履の跡に凍り、凍化も忘れて戦車兵の整備は苛酷だ。

凍風の如く、雪原に凍結道に踏みこみ、凍化野砲部隊の監視線が伸びかてゐる。

五	標	子	板
最高			
最低	26		
現在	-26		

てし服征を窓動のこる露物が仮示標編編

る。曰くアリューシャン作戦は日ソ戦の序幕なり、わが支那東方面の戦線整理は北方進攻のためなるの宣傳等々、これら日ソ兩國を精神的に對立尖鋭化せしめようとする米英の憎むべき策謀を、儼として粉碎する力こそ、わが北邊を守る將兵の威力なのである。

北に南に擧がる騎友の蹄々たる戦果に、抑へ難い勇心を敢へて抑へぬやる心を賞戦以上の猛訓練によりむけ、いま酷寒の北の最前線に黙黙として大東亞北邊の護りを固める將兵のあることを銘記しよう。

北邊の護りは絶対に安全である人々は安心して與國の聖業達成に邁進されたい。これは、かつて海津關東軍司令官閣下が祖國に送られた言葉であつた。

この言葉の陰には、北門に晝夜をわかつた五嚴の警備を続けるわが關東軍將兵の黙々として使命をはたす尊い姿がある。今日北邊は静寂である。だが敢て挽回に足掻く米英軍は、あらゆる機会をとらへて日ソ兩國の隙間を窺してゐる。





敵機が顔負けするやうな望遠鏡

お正月の休みはなし

〇〇防空隊

撮影 梅本 忠男

敵機は必ず来るだらう。だが、恐れはしないぞ。これに物言はせてたゞ落してやる。弾丸を磨く兵士の自信は強い



敵機来るの報いたれば、たゞ一打ちに仕止めよう
と高射砲隊員は流石に設置の陣を布く



正月だからといって防空の任に當る將兵には休日はない。お正月の匂いをお飾りにかいで、通信兵は夜となく責となく新しい徹夜の勤務に追はれてゐる
蛇に阻まれた船といふ言葉があるが、光とへ夜とはいへ、この望遠鏡に捕へられた敵機は正に百年目だ。零下にする寒夜にも、通信兵の眼はらん／＼と輝いてゐる。防空に當る兵隊さんよ有難う

「敵機は必ず来る」さうだ。防空に對する待つあるを待たれぬの覚悟は、はつきりできてゐる。だが、われ／＼はこの覚悟を十分、ふだんの生活の中心に生かしてゐるだらうか。……警報は何時發令されるか、勿論推測できない。また、何時自分の任んでゐる町内が、隣組が敵機を相手に



お正月の休み

修羅の決戦場となるのかも知れないのだ。さうと知りながら、なほ夜おそくまで酒食に耽り、または年末、年始の休暇に一家揃って家を空け、登山など出かけた、不心得者はなかつたらうか。大東亞戦争勃發以來、僅かに昨年四月、敵機の來襲をみただけで、われ／＼は平穩な中に戦艦二年目の春を迎へることができた。巷には和やかな羽子板の音が響き、おほらかな初春の喜びが溢れてゐる。だが、われ／＼は塔臺の歪をあげて、新年の祝詞を述べ合ふ前に、この瞬間も、衣風に曬されながら、しつかと望遠鏡を握り多空を見つめてゐる兵隊さんのことを想起しよう。また、静かに更けゆく夜、火鉢を圍んで新年の團樂に寛ぐ時も、なほ受話機にかじりついて、各方面の情報連絡にあつてゐる兵隊さんのあること、決して忘れてはならない。

さうだ、敵機は必ず来る。今年こそ、敵機の來襲に備へる戦争生活を、はつきり確立しようではないか

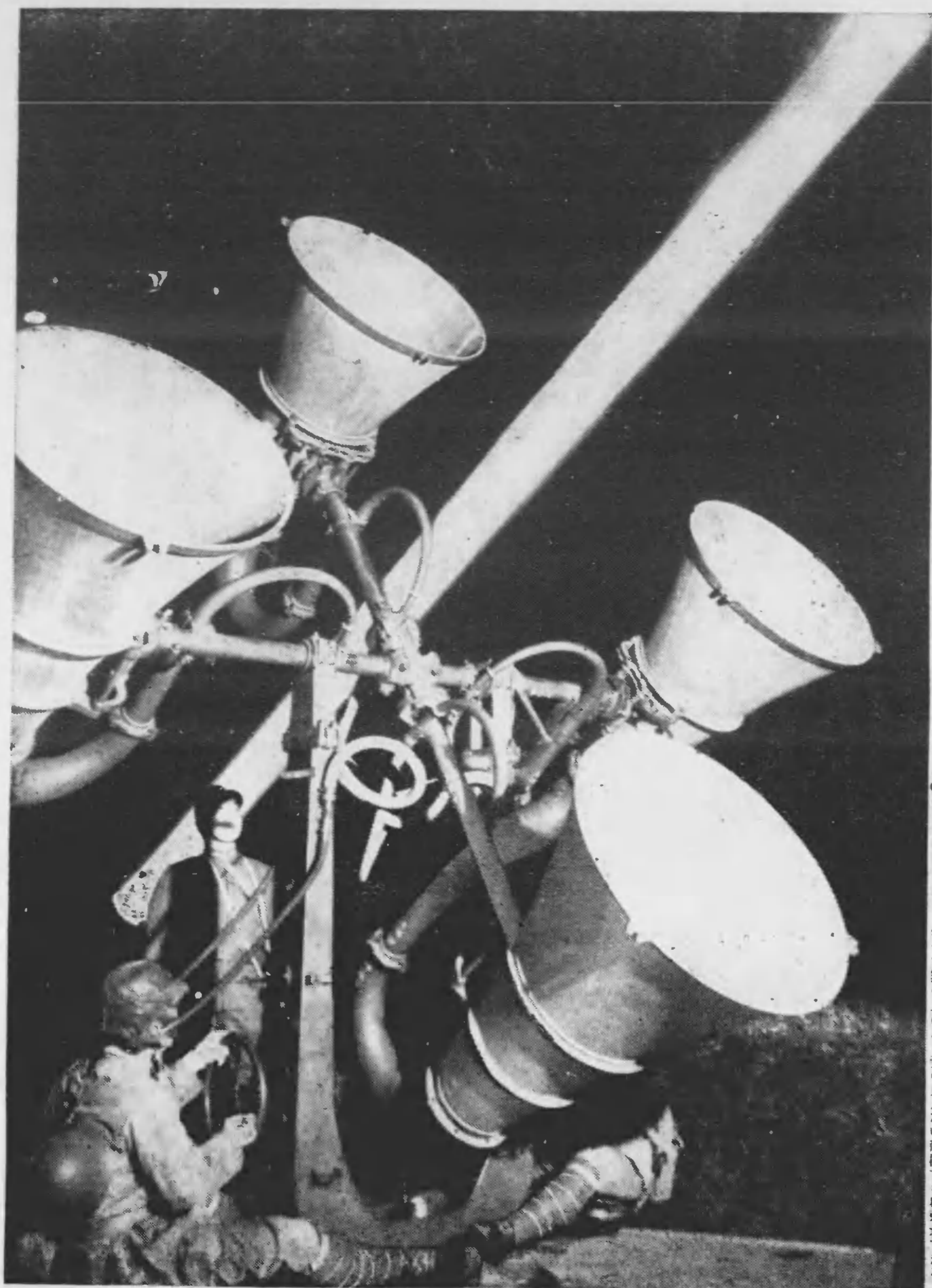
高射砲の訓練は、所んど瞬間的に行つてよいから、短時間に決定してしまふ。それだけ兵士の砲に對する愛情や信頼は大きく、月頃の手入れも本當に念入りだ



合内には敵機がイングリッシュの機體が出現する。「我ハ陛下ノ敵ヲ討テ、誓テ任務ノ完遂ヲ期ス」食卓の前に兵員一同、同調しい音を唱和し、來らば必ず撃つぞと決意を固める



計算班は防空隊の頭腦。聴音機が敵機を捉へると、寸秒の間に位置、高度、速度等の諸元が割出される。従つて表の上にある姿の見えない敵機でも射撃ができる



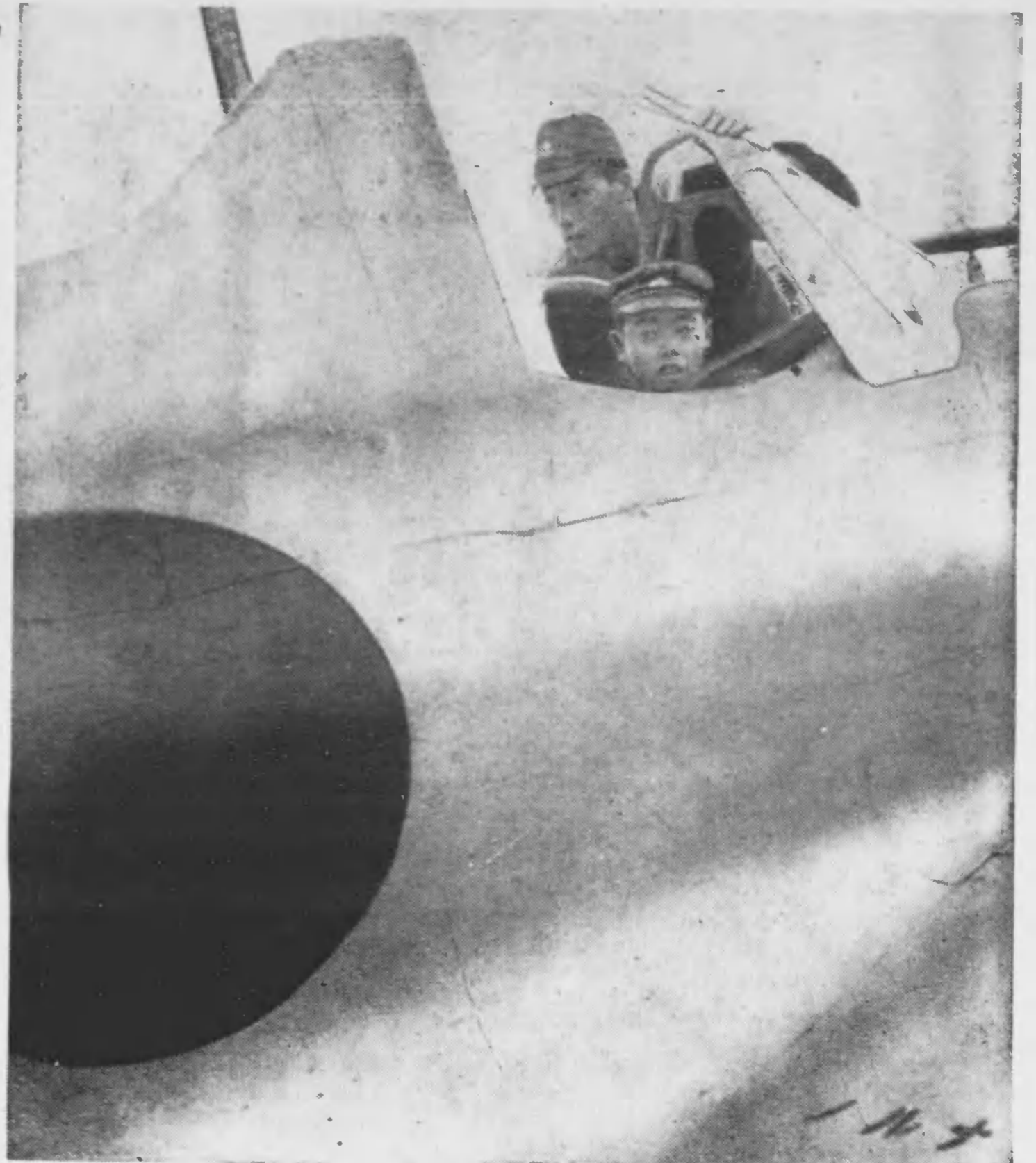
聴音機が鋭敏な聴覺の網を張つてゐる。哨一爆音：數閃の光芒が闇夜を縫ひ機影を追うて



今日こそ天晴氷豆海就鳥

大分国民学校生徒の航空隊一日入營

撮影 大分市 白水定男



◁ 今日これで大空をぐるぐる回ってやる。僕はそのときさう思ひました。
 ▷ 飛行服を着せられると僕の気持はもう宙に浮いてしまひました。戦闘機の性能を詳しく説明していただきました。

兄さん
 僕たちのやつのお願ひがそろそろかなつて、待ちに待つたその日は来ました。毎日、僕たちの学校の上を素晴らしい編隊で飛んでゐた海軍戦闘機に、僕ははやくの飛行服を、天晴れ着込んで乗込むと、もう敵機が挑戦してくるやうな気さへして、ブル／＼と武者ぶるひがとまりませんでした。
 大分航空隊の近藤司令のお話にも、制空権がいかに近代戦で重要であるか、また九軍神の後に続く少年航空兵を、日本はまだらんと作らねばならないことなどがありました。
 兄さん、僕はこんどの見學で、いよいよ海軍少年航空兵を志願する決心を一層かたくしました。それまでもう一息勉強して、もう一息體力を練ることです。大いに頑張りますから、兄さんも一つ応援してください……



◁ 水兵さんと一緒に有名な海軍飛行

お正月の休みには 慰問の手紙を送りなさい

寒い北の前線、正月も忘れて戦つてお下さる兵隊さん。あなたがジャングルをくぐつて進撃する時にも、雨と降る敵弾の下を突撃する時にも、あなたの腰には慰問袋から出てきたお人形さんがお供をしておたてました。戦場の合間の心のびやかなひと時には、慰問の手紙を何べんも何べんも繰りかへしては読みかへし、ほろ／＼になつてしまつても、まだ大切に仕舞つておくとかうかひました。おもちやも、お習字もみんな／＼あなた方を子供のやうによろこばせ、死ぬやうな苦しさも



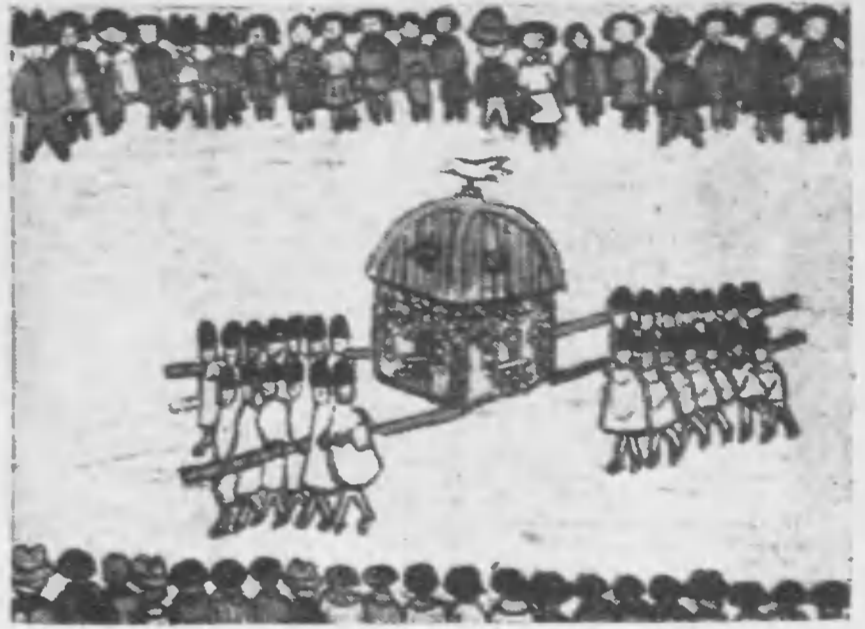
忘れさせて、新しい力と勇気を湧き上らせるといつて下さいました。私達は今年もきつとお

送ります。今までよりも、もつと／＼たびたひ慰問のお手紙や心をこめた品々を

（昭和）
紙はお清書もボクノハタタノエダヨ。私のお手紙は喜んで下さるわ。 撮影 仙波



子文田藤 生年三校學民國野占那區西市屋古名 會常供子



子文井栗 生年二校學民國地築市知高 祭お



雄幸島高 生年五校學民國五第市津沼 影撮念記



保 川山 生年四校學民國崎浦市津金 香除掃

少國民軍歌 慰問の

御手紙有難う

三浦 弘

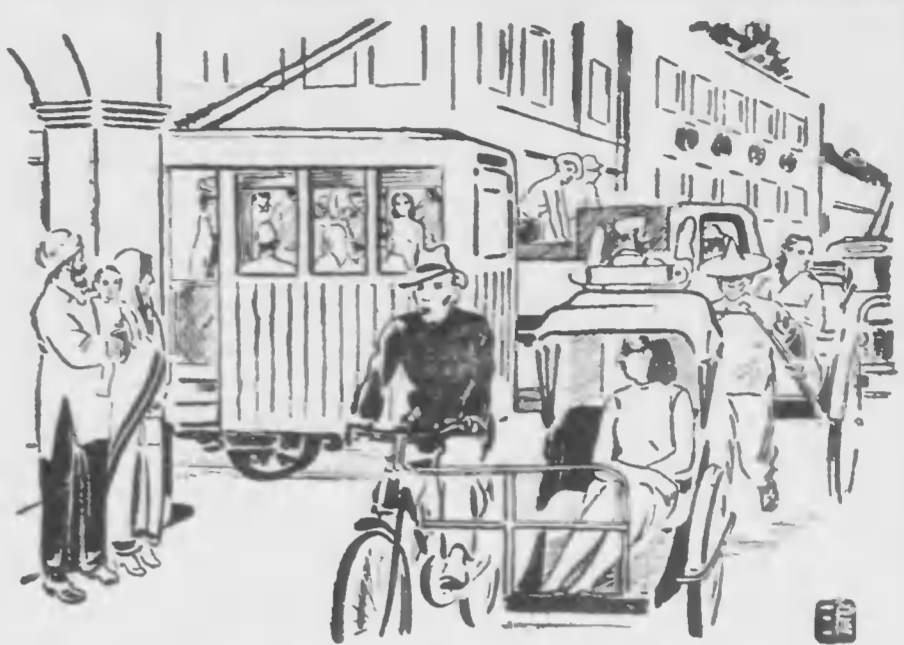
一 慰問のお手紙有難う
色もくろがね戦車の繪
ゴー／＼走る逞しさ
さうです それが日本の
世界に誇る強さです
日の丸仰いで 僕達は
日本の空に言ひました

二 うれしいお手紙有難う
墨も湧えてるお清書だ
ノビ／＼書いた「神の國」
さうです それが日本の
世界に誇る心です
日の丸仰いで 僕達は
日本の空に言ひました

三 元氣なお手紙有難う
楽しいお話 運動會
さうです それ／＼駆けた勇ましさ
さうです それ／＼日本の
世界に誇る力です
日の丸仰いで 僕達は
日本の空に言ひました

四 やさしいお手紙有難う
可愛い／＼紙のお人形
ニコ／＼笑つて慰める
さうです それ／＼日本の
世界に誇る守です
日の丸仰いで 僕達は
日本の空に言ひました

★南の兵隊からのお便り★



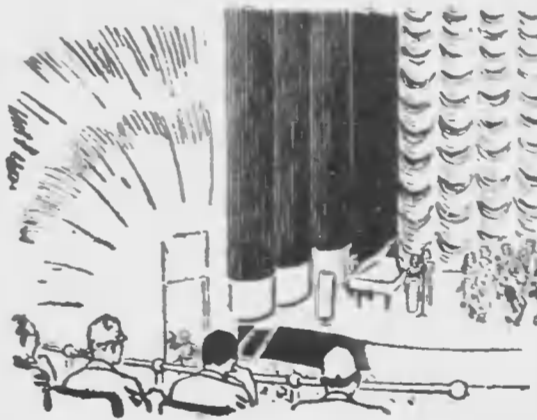
街のりもの

「昭南市バス」昭南市電と併走して大活躍した大型バスや、無軌道電車の間を支那人のひく洋車や、シクロ（内地の更生車）がスル〜と抜けて行く。普通のタクシーも通れば、自轉車も走る。昭南市内の交通は建設復興のテンポのやうにめまぐるしい。辻々では、賑の信託板を背負ったいかめしいインド人のお巡りさんが巧みにこれらを整理する。トラクタで疾走する半裸の傭人の青い眼にこの街の風景が何んと映つてゐるだらう。



昭南素描

昭南素描 田村辰三



昭南の劇場

最近ぞく〜と内地から慰問團が繰り出して来る。こゝ赤道直下の昭南では、たつたしい東京音頭が奏でられ、佐渡おけさや踊られる。時としては「將軍と兵隊」なども上映される。内地の香りが兵隊さん達を恍惚とさせてゐる。現地民達は、最初は奇異な眼でステージを見てゐたが、驚歎と畏敬の眼をみはる。

昭南郊外

亭々たる椰子の梢に南の微風が靡り、殆んど原色に近い熱帯の草花が咲き白つてゐる。晴陽收まつて約十ヶ月、いま昭南の郊外はあの激戦を忘れたかのやうに美しく静かである。明るにアジヤの陽光を浴びて歩む現地人の顔には希望と喜びが溢れてゐる。蜂の集のやうな煩悩に、かつての激戦を物語る歌トーチカがはかない抗戦の思慕をさらしてゐる。この地に骨を埋め、勇士の魂が新生昭南をシツと見守つてゐる。

愛馬と共に

山田元八

南部ビルマ作戦の一挿話である加藤第一等兵（愛知縣東春日井郡水野村中水野南山）がはじめて馬を與へられたのは、部隊がいよいよ行動を開始しようとする朝だつた。

彼に與へられた馬は、馬毛に星のある中形の、鬣の房々した毛艶のよいがっちりとした馬だつた。激発名簿には岐阜縣海津郡城山村山崎、古川義治としてあつた。

森陰の厩ではいま丁度、朝飼がやられてゐた。加藤第一等兵の腕馬、孝作はとどろき鼻をラッパン鳴らし、前足で土を掻き、與へた飼付をばた〜とこぼして仕舞ふのだつた。

「どうしたのだらう、可愛氣の無い奴だ」とじつと見つめてゐた。すると、向ふの方で分隊長が「早く馬手入をせよ。今日は忙がし〜いぞ」といひながら、一頭々々馬を見に歩いてこられた。

加藤第一等兵は、何だかこいつ助の強さうな奴だ、俺をなめてゐるのかしらと思ひながら、腹に力を入れて馬を見ながら

「これ、オーラ」とやつてみた。すると孝作は、黒目勝ちな眼差をあけながら、一寸こちらを見

一杯の氣合を掛けて「オーラ、オーラ。頑張れ、それぞれ」

溜なす汗、波打つ鼓動。この坂で止めたら最後、左は千坂の谷右は礫の累石、もし馬が後に下れ

ハツと世をとる。彼等はみな者なしてゐる。貴殿の別なく右手先を器用に驅使して、飯は勿論、どんな野菜、肉フライ等に至るまで手廻みでムシ〜やる。食物の味覺は舌だけでなく、手で觸つて食べて初めて完全な味を知るのだといふ。しみ〜習慣の奇異に打たれたが、筆者も二口、三口たべたが、その辛さは火のやうで、大粒の涙がポロ〜出てくる。唐辛子、胡椒、カレー等は、いやはや〜

次ぎに出されるドリアン等の果物は強力な精分をつけ〜コーヒも砂糖なしの味なし〜コーヒである時々、僧侶の祈りめいた言葉が出る。満場の人々は両手を擡げてこれに合はして何か祈りを捧げる「アイ、アイ、アイ」

二人の幸福を祈るとでもいふのか、その聲は神祕に充ち〜てゐる。純真な彼等の顔付がしみ〜筆者の胸をうつ。新隊新編はそが立ち上り、靜かに、また腕を組んで退場してゆくのであつた。

「それはさうさ、丈夫な馬だつて、これには參るよ。たまるものか。身軽な俺達でさ〜頭を出すのに、百貫餘りの重い荷を曳き、手に二、三杯の糧と一日、二、三滴の水だ。それにどうだ、この暑さは、まるで殺人的だな」と語りながら、そこに坐つた一リットルの水。これは命にもかへ難いわけ〜一日の水量である水は無い。泥水でもよい、飲みたい。一滴でもよい、馬にやりたい。祈りつゝ行く道及の山路に、飼付の糧を潤ぼすのに、惜し氣も無

突然「おい〜この馬は誰の馬だ」と分隊長の聲がすく横でした

「はい、加藤のです」

「お前、これは痛痛だぞ」

「は〜とその瞬間、立ちすくむやうな感じがした。痛痛〜あの恐ろしい痛痛かと思つてゐると、分隊長が續けざまに「おい〜既週番、既週官殿に連絡をとれよ。どうも變だ」

加藤はぼろつとしてしまつた。數百頭の馬の中で、選りに選つて自分の馬だけが、しかも今朝買つただけなのに、何んといふ皮肉なことだらうと思つた。中隊は一頭の馬も欲しい今なのた

白い作業衣を着た市川既週官が向ふからこられるのが見える。その後を既週番が治療具を持つて足早に走る

「昨夜、水も飼付もやつたか」

「はい、やりました」

「今朝は？」

「水だけ三つ飲みました」

「飼付は？」

「食へません」

既週官は馬の前に敷つてゐる糞を見ながら

「お前、やり過ぎはしないか、飼付を土の上にやつたらう？」

「違ひます。飼付をやつても前馬を馳まして坂を切り切つたのであつた」

靜かに暮れる戦場の宵に、兵馬は宿營の森に前後を忘れて、のめり寝に寝て仕舞ふ。夜半の折から、誰か既の横でがさ〜ととしてゐる者がある。既週番の森信義上等兵（名古屋市昭和區廣路町）が闇に透して見ると、加藤第一等兵が寝る目も惜しみ何か切りきざむ様子に、そばに寄つて見ると、道で拾つた繩切れを小刀で眼目もふらずに明日の飼付にと切つてゐるところだつた

「おい加藤。お前、馬も大事だらうが、少しは自分の身にも注意をしなよ」

と聲をかけた

「お〜森さんか。作の奴どうも昨日の坂がこたへたので、けつそり疲れて、今日は少し體を起してしまつた」

「それはさうさ、丈夫な馬だつて、これには參るよ。たまるものか。身軽な俺達でさ〜頭を出すのに、百貫餘りの重い荷を曳き、手に二、三杯の糧と一日、二、三滴の水だ。それにどうだ、この暑さは、まるで殺人的だな」と語りながら、そこに坐つた一リットルの水。これは命にもかへ難いわけ〜一日の水量である水は無い。泥水でもよい、飲みたい。一滴でもよい、馬にやりたい。祈りつゝ行く道及の山路に、飼付の糧を潤ぼすのに、惜し氣も無

足でこぼしてしまひました

「足でこぼしてしまひました」

既週官は馬の胸から腹、腰へと移されて行く。加藤第一等兵は既週官の顔と既週器とを見比べながら、じつと見つめてゐた。

そがて既週官は既週器を耳から外しながら「よし、冷水灌湯だ。すぐ準備せよ。それまでうんと腹をこすつてやれ、腰に向つてな」といひながら、向ふの方に、馬を一頭々々見に行かれた

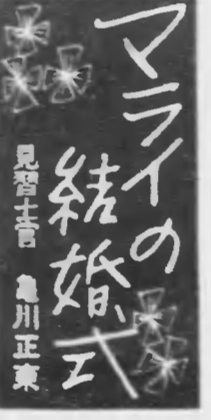
間もなく既週官が週番上等兵とこれ「尾根を纏帯でく〜れよ」と命ぜられた。恐ろ〜尾の先を握つたとたんに、後趾をばたんとやつた。加藤第一等兵は思はず手を放して飛びさがつた。そしてわれながら不味いことをしたと思つた。既週官が笑ひながら「年取るとお身大切な」と無造作に馬の尾根に纏帯を巻かれた

「けつそりと瘦せ衰へた馬が、首をうなだれて重い荷を曳いてゐる姿は、一入戦場の秋に色添へて、淋しい姿だつた」

秋とはいへ、日中は祖國の眞夏の暑さなどとは比べられない酷暑だつた。加藤第一等兵の屬する第十一班は今日までに三頭も馬を斃したが、班の馬は皆優秀馬揃ひだつたので、他の馬の二倍近い重荷を曳いてゐた。日中は暑いので、夜中の二時頃出發し、目ざす目的地には拂曉に着けると思つたが、坂また坂のこの難路、到底われ〜の豫想通りの行軍ができなかつ

た。中隊長も小隊長も、皆々な徒歩で、前の坂に馬が倒れた。後の坂で轡木が折れた。「オーラ、オーラ」と険境の山路に、討つ兵隊の聲に和して、名も知れぬ猛獣猛鳥の怒聲する深山の谷の惨憺な無氣

「およそ四、五十名の人々がみんなあぐらをかいたり、或ひは勝手な姿勢をして坐つてゐる。いづれもマライ特有の背腹の下に花模様のパロンを巻いた唄れの盛装をして、認められて式場の中央に。その後には今日の新郎新婦の顔がもつて、すぐその傍に坐るや、満場の視線が異様の中に、それでも「やあ、いらつしやい」と言ふやうな人馴つこい眼をみはる。日本の軍人が来るとは意外だといふ顔つき。やがて式が始まつた。私のすぐ傍の僧侶が一冊の本を取り出すと、新郎新婦の縁達が何やら署名し、續いて新郎もはにかむやうな顔をしてサインを済ます。これが戸籍記載のことだと聞かされた。後日、軍政部の戸籍係に廻るといふことである



マライの結婚式

新婦は下をむいたま〜靜かな呼吸を放つてゐるらしい

やがてとんでもない大きな血に山と盛つた料理や、飲々の皿にたつぷりした料理があらはれた。果ては牛の脚かと思はれる恰好をした骨のへの字に出ばつた肉フライ等が、筆者の前に現はれた時には「さ〜か面喰つた」

「マスタードとろ〜」と言はれて

饒馬孝作は連日の疲れも多からうに、加藤の心が通じてか、驚を振りかざし、前趾をがっちり踏みしめ、要處々の補助兵の援助に力を併して、阿修羅の如く大坂の上を、砂地の坂を突き進む姿に、力

「おい加藤。お前、馬も大事だらうが、少しは自分の身にも注意をしなよ」

と聲をかけた

「お〜森さんか。作の奴どうも昨日の坂がこたへたので、けつそり疲れて、今日は少し體を起してしまつた」

「それはさうさ、丈夫な馬だつて、これには參るよ。たまるものか。身軽な俺達でさ〜頭を出すのに、百貫餘りの重い荷を曳き、手に二、三杯の糧と一日、二、三滴の水だ。それにどうだ、この暑さは、まるで殺人的だな」と語りながら、そこに坐つた一リットルの水。これは命にもかへ難いわけ〜一日の水量である水は無い。泥水でもよい、飲みたい。一滴でもよい、馬にやりたい。祈りつゝ行く道及の山路に、飼付の糧を潤ぼすのに、惜し氣も無

味さは、到底内地では想像できないことだらう

今も登り三メートルの大坂跡だ。分隊長が「加藤、しつかり馬に氣合をかけて行け。餘り手綱を長くするな。い〜か。行け」と、

味さは、到底内地では想像できないことだらう

今も登り三メートルの大坂跡だ。分隊長が「加藤、しつかり馬に氣合をかけて行け。餘り手綱を長くするな。い〜か。行け」と、

味さは、到底内地では想像できないことだらう

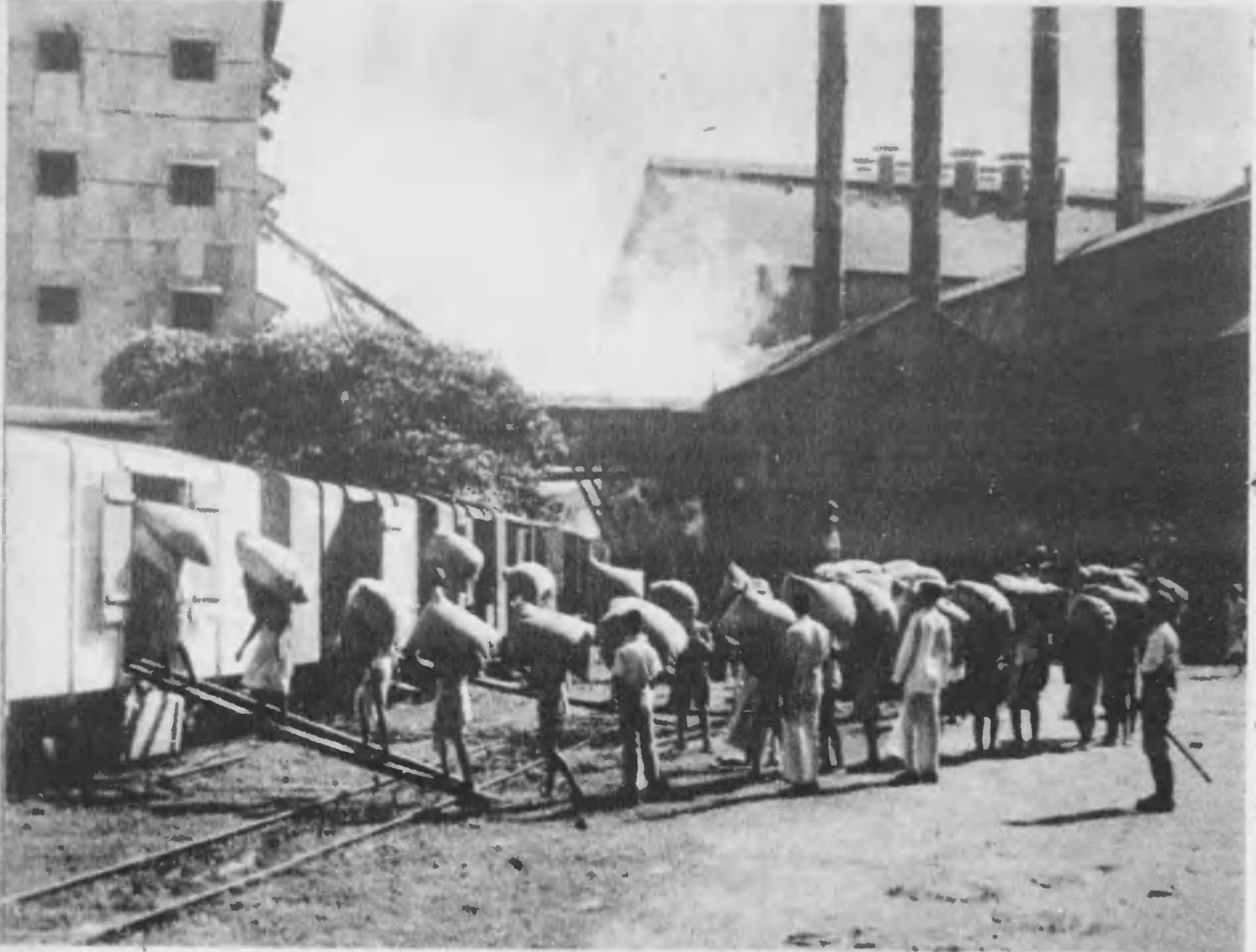
今も登り三メートルの大坂跡だ。分隊長が「加藤、しつかり馬に氣合をかけて行け。餘り手綱を長くするな。い〜か。行け」と、

煙草も頭も 自給自足

マルビの貨物廠

文 野田 高田 一夫
 田代 村野 川野 茂平

例夕のおじぎもどら恰好のついた被服工場の職さんたち
 倉庫から貨車へ、そしてビルマ全土へ、お米の出荷は順調だ 精米工場



「戦後大へんたと思ひますから、国内の皆さんには出来るだけお世話をかけたくないです」とは、未踏の地理的困難を克服し、物資に頼れぬ熱帯の気候と闘ひ、眼に見えて来た一勇士の奮りなき述懐である。これはまた、戦地にある兵士の誰かが抱いてゐる親身な念願であり、強靱なる確信でもあるのだ。

現地軍のお要所を承る貨物廠でも、戦後の食糧を少しでも軽減しようとの親心を碎き、現地での自給自足を建前として種々な計畫が進められてゐる。貨物廠といへば、何から何まで国内製品に依存し、これを適當に増補加工して補給分配する一種の配給所の如きものであらうなどと早合點したら大間違ひ、第一總將兵の眞實な心情を傷つけることになる。

運送の原料や資材の發見が平穩な上に、人的資源と技術の補足が十分でない四圍の恵まれる條件の中から、衣食住に關する萬般の軍用品を造り出さねばならぬ苦心は並大抵ではない。とり分け、氣候風土の異なる土地で兵隊さんの一番歡迎する食物、いはゞ日本人の好みに應ずる食物とするには、相當な技術を要するのである。ましてや、現地軍の自活の道を打ち立てるまでに事を運ぶには、想像を超えた苦心と努力が拂はなければならぬ。

貨物廠の先遣隊は、戰部隊の区域に前後してラングーンに進駐し、直ちに英國人ことにユダヤ人の經營になる廠所の施設、工場を各所において接收して、仕事の段取りをつけた。戦場では食へることが何より肝腎だとて、最初に精米所が開設された。印度支那山脈を乗り越え、何百里もの長い道程をたしかひつゞけてきた勇士の軍靴は無様に破れ、被服はボロボロに破れちぎれてゐる。何を指しても、軍靴の修繕工場と被服の縫工場とが、早急に必要となつたわけである。いざ仕事となつても職工が少い

暹羅歌
 征かんかないかに山路のけはしとして皇御國のつはもの我は
 天地の神聞し召せ今日よりはたゞ大君のしこのみたぞ

ビルマ方面軍 秋山 隆義
 陸軍中尉 秋山 隆義
 陸軍中尉 秋山 隆義

川歌
 洗濯は母に負けない五歳月
 隊長の髪面椰子の實をすゝる
 愛兒の意見演む勇士の眼笑つてゐる
 兒の便り土産に首をたのまれる

ビルマ方面軍 三代木若松
 陸軍兵長 三代木若松
 陸軍兵長 三代木若松

新卒の行軍兵にも水をかけ
 胸つまる母の文字や初日より

ビルマ方面軍 森谷米光
 陸軍少佐 森谷米光
 陸軍少佐 森谷米光

く水筒の水を馬に取へる加藤一等兵だつた。又どんなに疲れてゐる時でも、青馬を見れば、如何なる道も遠しとせず、愛馬にやるのも被だつた。

「おい、作、苦しいか。元氣を出せよ。可哀さうになあ、苦勞させて。もうすぐだ」

「作、小隊長殿だ。分るか、これ、作。頭を上げる。何故お前は立てないのだ」と馬の首にすがつて呼ぶ加藤一等兵の眞心に、孝作は充血しきつた眼を見開き、じつと加藤を見つめてゐる。その眼差しは、母に抱かれる幼兒の如く安らかなものだつた。

「其今敵官殿に見ていたゞきました、駄目らしいです」
 「さうか、よし」と小隊長は愛馬を山に一種入れて、砂地を走つて行かれた。

「おい、作、苦しいか。元氣を出せよ。可哀さうになあ、苦勞させて。もうすぐだ」

「作、小隊長殿だ。分るか、これ、作。頭を上げる。何故お前は立てないのだ」と馬の首にすがつて呼ぶ加藤一等兵の眞心に、孝作は充血しきつた眼を見開き、じつと加藤を見つめてゐる。その眼差しは、母に抱かれる幼兒の如く安らかなものだつた。

靴下を切つて馬に濡させたことも知り、日頃の彼を知るだけに、小隊長の胸に、何か熱いものがこみ上げてくるのだつた。

「小隊長殿、自分を残して下さい」

部隊は、夜を日につぐ行軍を続けねばならなかつたが、愛馬と共に死んでもよいと決意してゐる兵士の心情を汲み、小隊長も許さざるを得なかつた。

「それでは氣を付けてな。道は一本道だ。宿營地は、一里先の森だ。着いたら誰か迎へてよ。それでは氣を付けてな」

長聲一筋、聞き馴れた小隊長の前進の合圖がはつきりと聞えて来た。今まで死んだやうに寝てゐた

大東亞戦争日誌

—十二月—

八日 ◎ニューギニア島方面帝國海軍航空部隊は十一月二十四日以来本日まで同島東部ブナ附近において敵機四十四機を撃墜破砕し、敵哨戒艇二隻、輸送船二隻を撃沈、この間我が方の自爆または未歸還九機

十五日 ◎ビルマ方面陸軍航空部隊は、十二月五日および十日英領インド、チャタゴン港を攻撃し、英空軍、船舶および軍事施設に大なる損害を與へたり、本日まで何明せる主なる戦果

一、敵に與へたる損害(イ)飛行機撃墜十機(うち不確實三) (ロ)船舶撃沈七隻、大

十六日 ◎ビルマ方面陸軍航空部隊は十二月十五、十六日チャタゴンおよびフェンユイ兩飛行場を攻撃し、敵機二十九機を撃墜破砕せるほか兩飛行場およびチャタゴン埠頭の主要施設を爆砕し、これに甚大なる損害を與へたり

(一)敵機に與へたる損害、撃墜十九機(うち不確實四)、炎上四機、撃破六機 (二)我が方の損害、自爆せるもの一機、未だ歸還せざるもの四機

作は、むつくり首をもたげて、臍たる意識の中にも、前進記號に、歩まんものとあせり出す健氣さに加藤はその首を抱いて泣いた。

「作、静かにしろ。夕方、涼しくなつたら一緒に行くのだ」

立たんとはすれど立ち得ない己れに断念したものか、又ぐつたりと眠る如く倒れてしまつた。

中天高く上弦の月が輝く頃、戦友各務鏡次二等兵(岐阜縣加茂郡山上村)と、杉山千代吉二等兵(岐阜市益屋町)兼子保明隊醫務伍長(愛知縣愛知郡豊明村)の三名が迎へて来てくれた。

四人が力を合せて立たせると、おぼつかない足取りながら馬はやうやく立つた。杉山と各務が馬の尻を押し、加藤が前を曳き、兼子伍長が道案内で、一歩行つては二歩止り、三歩行つては五歩止りして歩む姿は、月光斜めに射し、露を含んだ戦場の小草の上に、影輪を見るやうな風情がするのだつた。

部隊に着いたのは五時頃だつた。その夜、病馬孝作の號の一進一退する病勢に一睡もせず看る彼は、さながら病める愛兒を慈しむ慈母の如く、一睡もせず介抱し續けた。しかしその甲斐もなく刻々に弱り行く軍馬孝作は、黎明と共に加藤一等兵の力強い腕に抱かれつゝ、南部ビルマ作戦の礎として、安らかに眠るが如く逝つた。



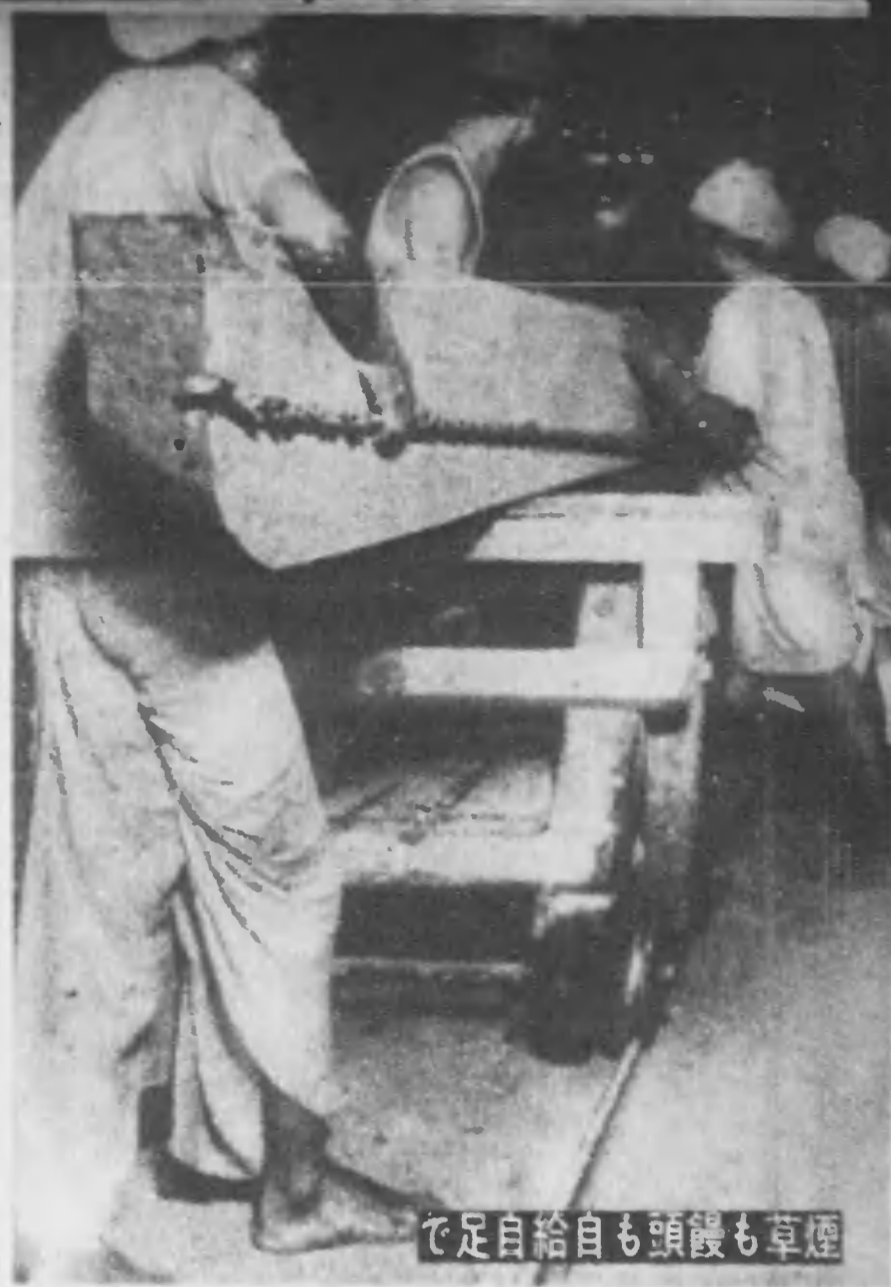
兵隊さんの手ほどきで、今日ではインド人がおいしいお味噌をこしらへてゐる。味噌工場

今日の酒保にはドラ機がまはるぞ、インド野郎の手さばきも板についた。製菓工場



インド人苦力がチーク付と取くんで、器をた。製材工場

ほろ／＼になつた車輪も物々しいインド人の手でどし／＼修繕される。製靴工場



煙草も頭も自由給足で



兵隊さんを喜ばせる菓子は特別なビルマ軍の手で。製菓工場



離れた少女もやさしく結ばれて、故郷の手を想ふ。被服工場



病床の職友が待つてゐるだろう。水がどん／＼積み出される。製氷工場



これでは何日か、つても、全軍の要求を充たすことが出来ない。焦燥を感じながら、高野大尉は意を決して、戦場で職工の狩り出しに駆け寄り廻つた。住民の避難してゐるバゴダ(佛塔)や公園に出かけては、武器弾薬を試みて、手に職のあるものは進んで申し出て、軍用に協力すべきことを説いた。一週間過ぎ、半ヶ月も経つて、やうやく職工も揃つてきた。婦女子の縫製工が、どしどしやつてくるやうになつたのは、それから一ヶ月も後のことであつた。かうしてビルマの住民の協力によつて仕事は潤滑となり、次ぎ／＼と事業の領域が擴大されてゆくのであつた。

今では、貨物車は、ビルマの各地に十数箇所の出張所と連絡所を設け、大小各地に亘つて數十の工場を擁する大車帯となつてゐる。精米所を筆頭に、製材、木工、被服、皮革などの大工場があり、味噌、醤油、酒の醸造から菓業、菓子嗜好品の製造も、行儀、ローソク、メリヤス、染色の各工場が経営されてゐる。この外に家畜、家畜の飼育、野菜の試作をやる農園の経営と豊富な近海漁業は、食糧確保の重要な部門を占めてゐる。

次に各工場について少しく説明してみよう。ビルマのなめし革は、殆んど植物なめしによつて、動物なめしではなかつた。工場も各地に散在してゐるが、手工職の域を脱してゐなかつた。貨物車では、動物なめしとし、皮革製産に馬力をかけてゐるが、早急には機械化生産の設備が出来ないので、現地の需要に應ずるだけといふ状態である。

河川の船着場や、鐵道沿線の米の集散地には、内地で見られぬ大規模な精米工場が設備されてゐる。粗で買ひ集めて、精米所で直ちに精米して輸出するわけであつた。ラングーンにある貨物車の精米所は、英國人の経営してゐたもので、粗穀を燃料とする蒸氣機関の七百馬力の動力によつて、一

晝後に二百トンの精米能力を發揮してゐる。こゝでは毎日、四、五百人のインド人苦力がかせつせと働いてゐる。この苦力は、今まで見てきたどこで働いてゐる苦力よりも力持だと思つた。普通、インド人の苦力は二人か、つても日本の兵隊さん一人に及ばぬほどで、ここにビルマ人に至つては、力仕事は出来ない位だが、このインド人の苦力は、百キロの米袋を一人で背負つてゐる。味噌は、現地産のカラベ(青大豆)モチコチ(白大豆)いんげんを主としてつくられ、極からじだけ内地から運び、現地で増産してゐる。酒も米から十日間醸りてつくり出されるが、試験の域を脱してをらす、日産一石で支那酒に似てゐる。いづれもかういふをこしらへるのが一番大切な仕事であるが、現地では温度も異なり、容易な業ではないといふことだ。醤油は、現地産のストツクを原料として、これを素材として、日本的に味を變へてつくり直して供給してゐる。

製菓工場は、ユグヤ人の経営になつてゐた大きな街中の工場を巧みに利用して、大量製造を遂げてゐる。こゝではビルマ人、インド人の男女工が二百名働いてゐる。ビルマの可愛い娘さんが、饅頭のアンコの包み方を教へられ、三ヶ月も経たず今では一人前の職人となつてゐる。一箇食べると腹一パイになるドラ製から、涎の出るとも甘い菓餅、カステラ、栗おこしの外に兵隊さんの加給品にするビスケット、食パンなどがどし／＼製造されてゐる。ビルマでは、煙草の栽培は認められるが、煙草の製造工場は備へたもので、恐らく外國に製造工場が設けてあつたのであらう。貨物車の設備だけは、全軍の需要には到底應じきれない。被服工場では、數百名のビルマの女性が甲斐々々しく働いてゐる。花好きな少女達は頭に花を飾り、ミシンの縫製機を並べてゐる光景は壯麗であつた。

安南の遊び

皆さんのとそっくりでせう

文 松崎隆雄 撮影 深澤隆雄



りけ石

安南の地に今も残る「日本橋」の地名や、日本人が作ったと傳へられる「來遠橋」によつて就くまでもなく、佛領印度支那、安南と、日本のつながりはあまりにも深く、あまりにもこまやかである。そして、この地の民情、風俗のどれにふれても、我々は、それがあまりにも日本に近い故に、故郷を、日本を感じて、強く、心をゆすられるのだ。江戸時代の職業づくしの繪を書いた安南のかるた、それで夜を樂しむ安南の人々もさることながら、行けり、繩とびに打興じる安南の子供達を見ると、誰でもが「我々が子供のときやつたのと同じぢやないか」と立止まつて見とれるのである。それほど、安南の子供達の遊びは、日本の子供達の遊びによく似てゐる。この安南の子供達の遊びを、いくつかに紹介しよう



球ころがし「イ・グリーン」といふ。これは、他の遊びと違って、學校の校庭でなければ見られない。なぜなら、セメントで作つた大きな球は、學校にしかないからだ。地面に大きな二重丸を引

カード遊び「チャイ・ター・パオ」といふ。大人から子供の遊びをもちつて来て、カード型に切り、これを何枚も重ねて、お城の中に置く。お城は、地面に小石で書いた四角の輪の中である。お城の中のカードには、遠くからみんな石をぶつける。お城から、神山カードを出したものが勝ちで、これは男の子達の遊びである。よく見てみると、日本の心こ遊びそっくり



しがろこ球

ムネ球を一つ置き、みんなは遠く離れた大きなセメントの球をころがす。二重丸の真中のラムネ球の一番近くに行つた者が勝ちで、同じ位のものがあつると、先生は、紐で正しく計つて勝ち負けをきめてやる

日本と同じく、女の子たちの遊びで、飛ぶ方も日本と同じだが、二重に飛んでやるときは、繩を踏む方が、ド、レ、ミ、ファを唱ひ、第二重のドのとき、飛ぶ方の頭の上で一べん繩を空に踏む。また、他のうたを唱ひながら、その繩子に合せて、頭の上で時々繩を踏む。だから、うたを知らない子や、飛びながら、よくうたを聞いてゐない子は、すぐ繩にひつかゝつて負けて仕舞ふ



び遊棒

い方の棒で叩いて棒を飛ばす。遠くに離れてゐる相手は飛んで来る棒を受け止め、これを投げ返す。打ち手の足もと、つまり棒の前に置いた長い棒に、投げ返した短い棒がうまく飛ばせばよいが、當らないと、打ち手は、短い棒を上に投げあげて、落ちて来るところを長い棒で打ち飛ばす。打たれた短い棒が、うまくみんなの頭の上を飛び越えたら、打ち手は、もう一度最初から棒を打つ

とが出来る。又、男の子がこの遊びをやるときには、頭の上に投げてから打つとき、いろ／＼と踏つた打ち方をすると、短い棒を頭や肩にのせて置いて打つたり、片足をくゞらして上に投げ上げて打つたり打つのをむづかしくするのである



こま遊び

男の子達の遊びで、棒の先につけた紐で、小さいこまをたゞきな棒はすのは、日本のやり方と同じである。このこまは、子供達が有り合せの木で、い／＼に作る。だから、下手な子が作ると、こまはよく廻らない

尙、かうした遊びをするとき、安南の子供達は、みんな跣足になつて仕舞ふのが面白い。靴をはいてゐる者も、安南下駄をはいてゐる子も、みんな跣足になつて仕舞ふ。彼等は、跣足の方が遊びい／＼らしいのだ



び遊ド一カ



び飛繩

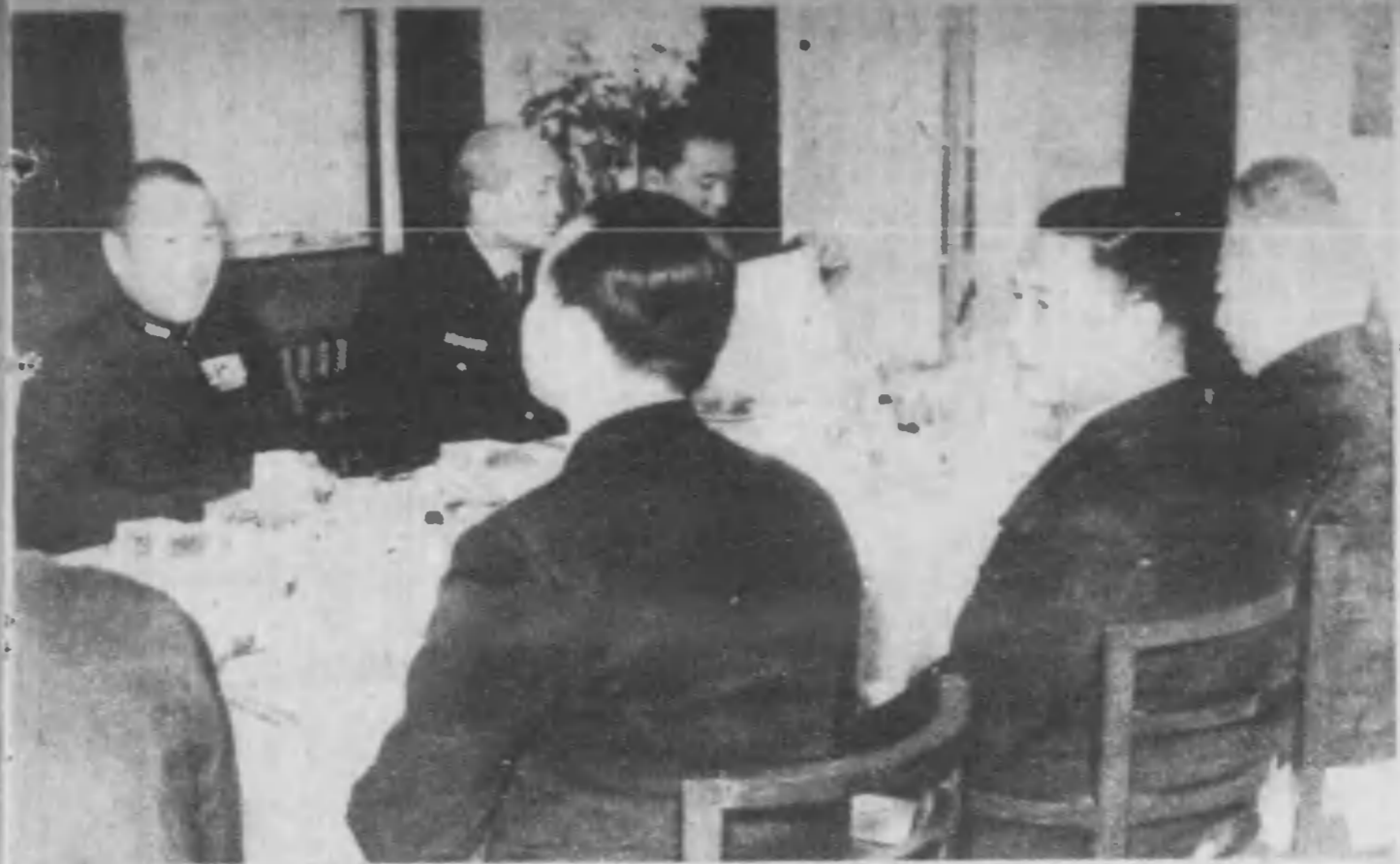


び遊まこ

日華一丸の誓ひ愈々固く

大東亞戦争一周年を迎へた新中国

十日、海軍公館に吉田支那方面艦隊司令長官を
訪ねた汪主席



大東亞戦争と新中国との関係
を簡明に解いた街頭移動展
市中を行進するわが海軍部隊
と中国民間團體の路上交歓

大戦勃発と同時に新中国は
直ちに聲明を發し、支那日本
との共甘困苦を決定した。が、
開戦一周年を迎へて首都南京
では、一年前のあの日を想起
し、大戦発達の協力を一段と
強化して、中華復興と保衛東
亞の使命を達成せんとする國
府側の諸行事が展開され、日
華一丸の誓ひもいよいよ固く、
戦争第二年へ發足した

撮影 支那海軍艦隊司令部



★ 復習室
各野軍などといふ言葉は日
本にはない。北滿の最前線に
閉居をついて今日も忠實守備
隊の猛進が續けられてあ
る。然か地帯を目ざして、大
軍をゆく雲霧部隊、時至れ
ば雲霧を捲いて白虎の如く襲
ひかゝるのだ
撮影 支那海軍艦隊司令部



復習室
本報からあなたは何を學んだ
てせうか？
1 雲の上から赤い見えない敵機は地上から撃つことができない。できる？ (17頁)
2 貨物船と補給船で内地から来た物資を現地で分配する所、そのやうなものはどうですか？ (17頁)
3 ビルマで兵隊さん達が、お徳目や果物をたべておました。内地からこんなもので送つてくるのでせうか？ (17頁)
4 軍用を養ふ恐ろしい病氣といふ病氣はどうしておこるのでせう。何村を多くお通るのだから、土の上に何村をやるから、全然何村をやらさないから、何を食はせるから、 (17頁)
5 ビルマとかわが南方片頭地の熱帯地方には病氣などしても冷やす水があるでせうか？ (17頁)
6 大戦勃発と同時に新中国は日本との同甘共苦を決定し、(18頁)
7 ビルマの現地人たちは味方と通ることができませうか？ (18頁)
8 ハゴダとは、ビルマ、タイなどにおける佛塔、(18頁)
9 我が北邊の邊りに對して敵軍英はいろ／＼の悪言を吐いておますが、それは何の目的ですか？ (18頁)
10 ダン・トーンとは、(18頁)
の子の神遊び、(18頁)
となるために何の苦行の一種、(18頁)
の形を、(18頁)
一問十點としてあなたは復習してせうか？
海軍公館の復習室は海軍省承認 (第五二四二號)

照準器

お正月 献納



お正月 献納
法華經のしき
讀ちんもシャベルが自由な
讀れるやうに
杉 延天

青年と大地
小泉 実郎

「少し、少しだが、これ
たハイナンドではない。靴
をぬいでガチャリと大地の
裏を踏んで歩くのだ。會社の
の休みの間、毎日朝五時
まで」



女子指導員
秋 玲二
松の内から風を運いて
「今日は雪でお留守の御主人、
このお菓子を致します。右へなら
な」



大東亞戦争一周年



寫眞週報 昭和十七年十一月二十一日 第百五十一號

お年玉で だんがんきって を買ひませう

第8回賣出 1月1日⇒15日
抽籤日 1月20日
1枚 2圓
割増金 1等1000圓
 以下多數
當籤割合 11枚=付1枚

賣切れぬうち 見入郵便局へ

<p>前線慰問に本誌を お読みになつたら本 誌を前線慰問に送り ませう。送料は内地 と同様で封封あるひ は開封にして第三種 と明記すれば、一部 一銭です</p>	<p>所 達 申 定</p>	<p>價 定</p>	<p>昭和十七年十二月 六日印刷發行</p>	<p>寫眞週報 (禁轉載)</p>
	<p>全国各地官報 販賣所 書店・賣店 新聞販賣店 寫眞材料店</p>	<p>▲預約配達希望 の方は一部十錢 (送料一錢)の割 合を以て前金を 添へ御申込み下 さい ▲特大號の場合は 其の都度御申込 金より差額を申 受けます</p>	<p>一部十錢 (送料一錢) 外函郵送に依 る地域は送料 共一部十九錢 ▲預約配達希望 の方は一部十錢 (送料一錢)の割 合を以て前金を 添へ御申込み下 さい</p>	<p>編輯部 情報局 東京市神田區 水田町一ノ一 印刷部 内閣印刷局 東京市墨田區大手町</p>

(1列開欄)A4折定額は3ト大の書本

内閣印刷局印刷發行